Noguchi Times

NOGUCHI INTERNATIONAL BUSINESS CONFERENCE NEWS Vol. 10　2015.11.19

米国財団法人野口医学研究所 創立者・名誉理事
トーマス・ジェファーソン大学 元副学長 名誉医学部長　Joseph S. Gonnella

CONTENTS

■ご挨拶 …… p2
■第20回NIBC開催内容 …… p3
■管理栄養士研修 …… p4
■取引先企業における勉強会 …… p5
■Wills Eye Hospital40周年記念顕彰式の報告 …… p6
■賛助会員のご紹介 …… p7
■野口記念インターナショナル画像診断クリニックのご案内 …… p7

ご挨拶

野口医学研究所での10年間

私は、今から約10年前に野口医学研究所（以下、「野口」）に入社致しましたが、入社当時と比較すると「野口」が行う事業は、質も量も随分と大きく変化したと思います。例えば健康食品シリーズの『新健康活力製品シリーズ』は、10年前には未だ存在していませんでしたが、現在では約1万店の薬局薬店で販売されており、毎月5万箱以上出荷される商品に成長しました。このシリーズの成長に依って「野口」の名前は一般消費者へも知られる処となり、このことは現在「野口」の中核事業である、OEM事業の発展に大きく貢献したと考えています。

又、「野口」の事業のルーツである医療サービス事業は、『ドクターホットライン®』や『健康相談』に加え、各種保険調査、メディカルツーリズム等「野口」の特色を活かした事業を開始し、第二の成長期を迎えつつあります。

更に、この夏には参与会副会長である西澤氏と協力し、外国人介護士育成プロジェクトを立ち上げました。このプロジェクトでは、「野口」が介護士教育を担当し、優秀でホスピタリティ溢れる人材を育て、人手不足に悩む介護施設に新たな人材が提供出来る様準備しています。

このように、「野口」の事業をサポートする参与会も、健康産業に於ける様々なニーズにお応えする為、常に新しいビジネスの構築を図っています。なかなか思う様に進まないことも多いのですが、「野口」の理念に基づき、目標を明確にして日々邁進しています。

さて、当財団参与会が主宰する野口国際ビジネス交流会もお陰様で21回目を迎えることができました。毎回80名を超える方々に参加して頂ける会となりましたことに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。当交流会が切っ掛けとなり、新規取引に繋がる機会を得たというお声も頂いています。

今後も、一人でも多くの方々のお役に立てる様、誠心誠意努力して参りますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

米国財団法人野口医学研究所
参与会 副会長　　堤　大造

第20回NIBC開催内容報告

（NIBC：Noguchi International Business Conference）

2015年9月18日（金）　　於：野口医学研究所　9階会議室

『生活習慣病を予防するための時間栄養学』

食事を効率良く身体に取り込む為にはリズムが大切です。人間の身体には、朝の光を受け、光を浴びてから1時間以内に食事を摂ることにより、1日のリズムをスタートさせる機能が備わっています。その為、朝食の欠食が生活リズムの乱れに繋がり、肥満者増加の問題にも関係するようだと分かってきました。朝食はとても大切であり、生活リズムの調整や生活習慣病の予防、情緒の安定等に影響していると言えます。

例えば、朝食を食べてから12時間以内に1日の食事を終わらせると、体重の減少が期待できます。夕食が遅い人は分食にし、おにぎり等の炭水化物を先に摂り、帰宅後、たんぱく質、野菜を油脂の少ない調理で摂取すると良いでしょう。

又、ゆっくり食べる・よく噛んで食べる、食物繊維を積極的に摂る、食後30分～1時間以内に筋肉運動をする等に依り血糖値のコントロールにも結びつきます。

食卓に主食、主菜、副菜（野菜）を取り揃えるよう心がけ、忙しい朝は納豆や即席みそ汁等を利用してみましょう。果物や菓子類は夕食時に食べると果糖が多く、中性脂肪が上がるので、朝食や昼食時に食べることをお勧めします。

最後に、食事を摂るということは、身体の中にあるホルモンバランスの調整に非常に役立っているということをご理解頂ければと思います。

女子栄養大学栄養クリニック教授
管理栄養士
蒲池桂子

『セカンドオピニオン外来の今　その4』

米国財団法人野口医学研究所 理事
特定非営利活動法人 野口医学研究所 専務理事
野口記念インターナショナル画像診断クリニック 理事長
佐藤俊彦

本日は、日頃クリニックで受診されている患者様のケースをご説明し、セカンドオピニオンの事例をご紹介させて頂きます。

まず1人目は、78歳男性の事例です。尿道癌を患った男性は、手術によって膀胱、前立腺を切除しました。その後、データをがんセンターに持参した処、レーザー治療のみで十分であったと判断されました。現実にその治療が誤りでもリーダー格の医師の選択で治療の全てが決定されることがあるので、出来れば、臨床医と病理医と画像診断医の3人に聴くことが大切です。

２人目は47歳女性の事例です。左乳癌を患った女性は、病理検査ではステージ０、DCIS（非浸潤性乳管癌）０でした。しかし、手術前にPEM（乳房専用のPET検査）を行った処、乳管外乳管癌を患っていることが判明し、左乳房を切除しました。超音波検査やマンモグラフィーでは見えないものが、PEMに依って発見できたのです。

このような事例もありますので、皆様の近くで診断にお困りの方や治療が上手くいっていないという方がいらっしゃいましたら、画像をご持参頂き、受診して頂ければと思います。

管理栄養士研修

2015年7月～8月
於:グランドめいと北小金

今年4月より入社した管理栄養士2名が、株式会社めいとケア様が運営する『グランドめいと北小金（住宅型有料老人ホーム）』にて研修を行いました。研修者の報告書から一部を抜粋し、下記にご紹介します。

食の知識を楽しく伝える

実習期間中に入居者へ私達から何か発信するものはないかと考え、「食の知識」面からのアプローチを試みた。グランドめいと北小金で実施を試みた理由は、比較的自立の高齢者が多く住む施設である為である。栄養士や施設長の方にお願いし、食札に栄養に関するPOPを載せて食事を提供することを許可して頂いた。テーマは、“夏バテ対策”とした。

＜手作りのチラシ＞

定例研修会議の重要性

感染・排泄・褥瘡対策部会／イベント行事部会／栄養・健康部会等、職員全員が何れかの部会に所属しており、部会で話し合ったことを基に定例研修会議が開催され、情報共有⇔意見交換⇒問題解決が行われている。役職に関わらず皆が同じ立場と目線で研修会を進行させていることに大変感銘を受けた。

部会があることによって職員一人ひとりがより良い施設作りの為に自ら考え、自ら行動し、更には研修会に参加することに依り、他職種者同士で共通目標を所有することが出来、これが入居者の満足度向上の要因の1つになっていると感じた。

接遇の大切さ

介護業界ではヘルパー一人ひとりが商品（＝サービス）であり、入居者はその商品に対して代金を支払っている。由って、頂いている金額に見合うサービスを提供する為に接遇は必要不可欠なものと断言できる。職員全員が接遇研修を受けることに依り、接遇の重要性を自ら意識付けることができ、この意識付けこそが入居者の満足度の向上に繋がるのだと確信することができた。

まとめ

研修では献立作成や食事管理は勿論、マネジメント管理や接遇等についても学び、実り多い2ヶ月間となった。又、「社団野口」の管理栄養士として新たな提案も出来たことも非常に良かったと思う。株式会社めいとケアの上村会長を始めとする職員の皆様と、「社団野口」の浅野社員総代を始めとする職員各位へ改めて感謝の意を表したい。

取引先企業に於ける勉強会

寮事業やホテル事業等を幅広く運営する共立メンテナンス株式会社様からの依頼を受け、10月6・7日の2日間に亘り、米国財団法人野口医学研究所の創立者・名誉理事である浅野嘉久が講師となり、『モチベーションを高めるために何をすべきか』をテーマとした寮長・寮母向け勉強会を実施しました。

冒頭では「野口」の基本コンセプトである『Humanity & Empathy（思いやりと共感）』の大切さについて説明し、寮生達と向き合う寮長・寮母にも不可欠な要素であることが伝えられました。

又、寮生とのコミュニケーションの重要性や心と身体のサインについても触れ、うつ病等の精神疾患に陥る前にしっかり対処することが精神的サポートに繋がると呼びかけました。

To provide collaborative, compassionate patient- and family-centered care, doctors must possess good interpersonal, humanity, and empathic skills.

医師へは医療技術だけでなく、徹底したヒューマニティの教育をすることこそが大切である。

Charles A. Pohl, MD
Associate Provost & Senior Associate Dean
Thomas Jefferson University

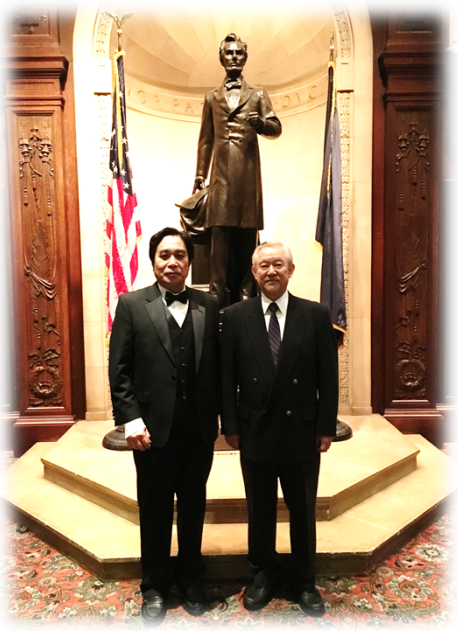
「社団野口」には医学博士、看護師、管理栄養士、サプリメントアドバイザー等のスタッフが常勤しています。又、「米国財団法人野口医学研究所」のネットワークにより、第一線で活躍する医師や薬学博士等、一流の講師による講演会・勉強会の実施も可能です。
健康や医療に係わる情報を一般の方向けに解りやすく丁寧にお伝えしますので、多くの企業様から好評を得ています。
ご興味のある方は是非「社団野口」までお問い合わせ下さい。

THE WILLS EYE HOSPITAL40周年記念 眼腫瘍科 顕彰式

40th ANNIVESARY OF THE WILLS EYE OCULAR ONCOLOGY SERVICE

2015年10月18日（日）
於:The Union League of Philadelphia

米国財団法人野口医学研究所の評議員会会長である佐藤隆美先生が、THE Wills Eye HospitalにおいてOcular Oncology Service(眼腫瘍科）への貢献者の一人に表彰されました。当日はThomas Jefferson Universityの名誉医学部長であるDr. Joseph S. Gonnellaのゲストとして、財団創立者の浅野嘉久と医学教育・交流室室長のStellora Sunyobi、NPO野口医学研究所常務理事の末永佳文が夫妻で出席しました。

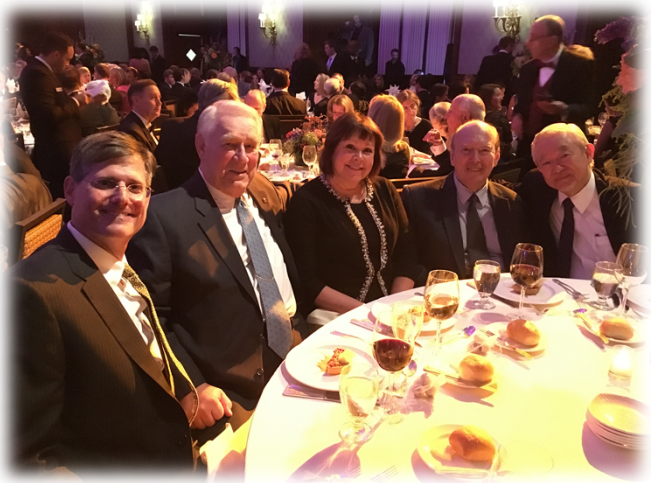


佐藤隆美
米国財団法人野口医学研究所
評議員会 会長

浅野嘉久
米国財団法人野口医学研究所
創立者・名誉理事

Wills Eye Hospitalは、Philadelphiaにある眼科専門病院で、眼に関する様々な症状の治療が行われています。佐藤隆美先生はメラノーマ（悪性黒色腫とも呼ばれる皮膚がんの一種）と免疫治療を専門としており、当日は多大なる貢献者として顕彰されました。

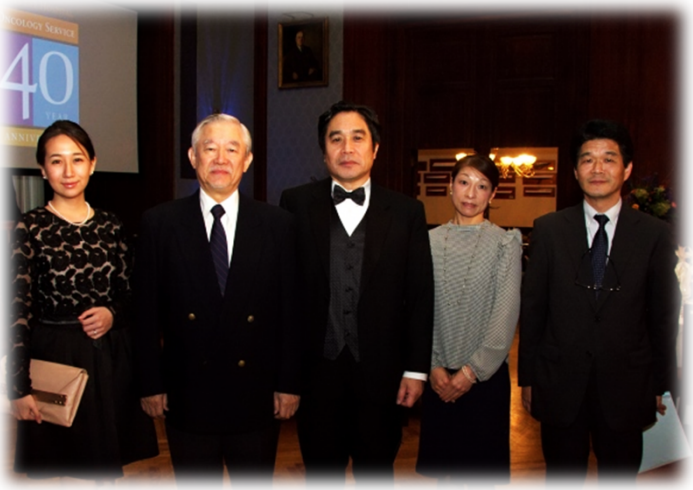
式典は、第5代米国大統領が演説を行ったという由緒ある建物“The Union League of Philadelphia ”にて行われ、華やかな会が催されました。



James B. Erdmann and Rebecca L. Erdmann
Phd, FASAHP

Charles A. Pohl
AssoDe Provost & Senior
Associate Dean
Thomas Jefferson University

J. Michael Kenney
米国財団法人野口医学研究所
常務理事・米国事務局長



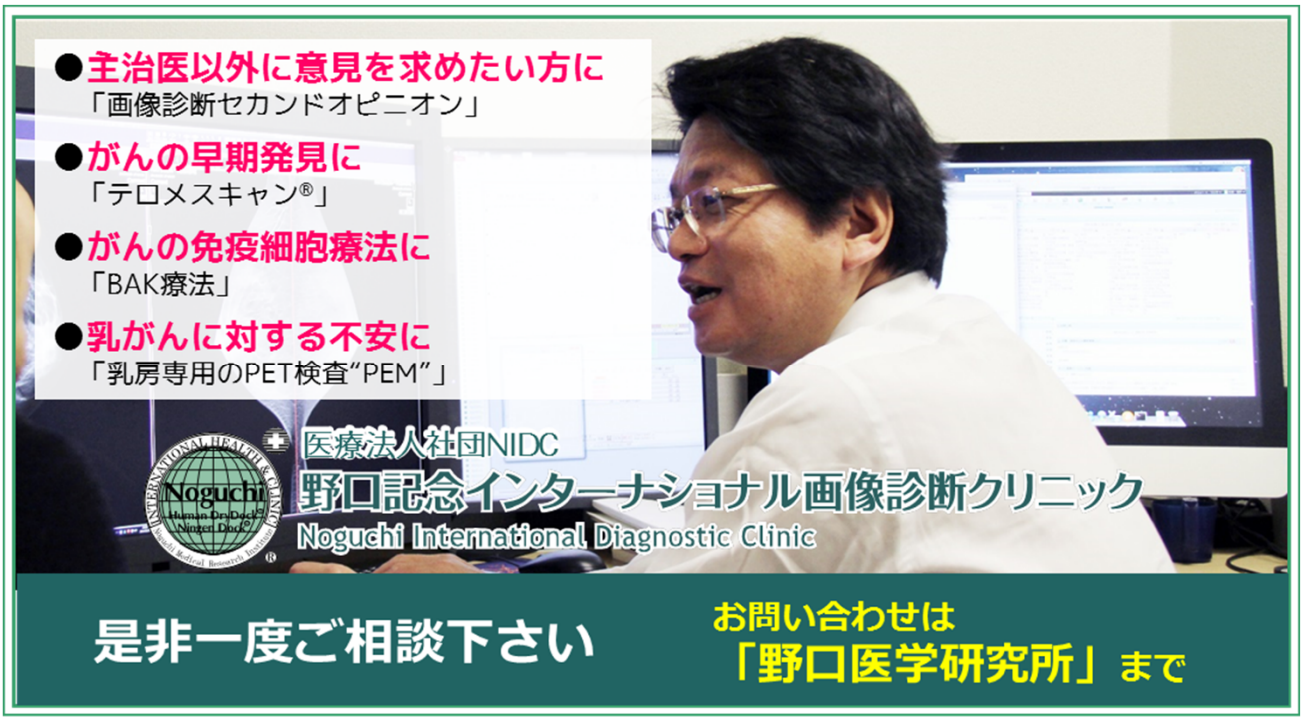
Stellora Sunyobi
米国財団法人野口医学研究所
医学教育・交流室 室長

末永佳文 和子夫妻
NPO野口医学研究所
常務理事

※上記写真は、ライフスタイル・マガジン『Philadelphia Style』にて紹介されました。

賛助会員のご紹介

米国財団法人野口医学研究所は、国際医学交流の促進を目的とした活動を永年に亘り続けてきました。日本が生んだ世界的医学者・野口英世博士の偉大な業績を称えその遺志を受け継ぐためには、国際医学交流活動は不可欠であると考えています。当財団の「賛助会員制度」は、多くの方々にこの活動へのご理解とご支援を承る役割を果たしています。今回は、株式会社ウエットトラストジャパン様をご紹介致します。



NOGUCHI TIMES

Noguchi International Business Conference News Vol. 10

発行日　2015年11月19日
発行人　安東 恭助
発行所　米国財団法人野口医学研究所
編　集　〒105-0001　東京都港区虎ノ門1-22-13
電話　03-3501-0130
米国財団法人野口医学研究所 参与会